

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功の



美術の時間
コミニカティブ

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その96 価値観の多様性を示すアートのはたらき

みんなの財産です

所蔵作品展の「特集 新収蔵作品を中心に」がはじまりました。新しくコレクションになった作品をお披露目し、関連作品とともに紹介するコーナーです。展示室にはじめて飾られた作品を見ていると、お客さまを案内するときもどことなく新鮮な気持ちになります。

先日遠足で来館した小学生には、「県立の美術館のコレクションは県民の財産ですので、みなさんの財産でもあるんですよ」というところから話をはじめました。美術館のコレクションを身近に感じ大切に、する気持ちをもってほしい、という願いを込めたお話です。

そして、「今までにこの美術館に来たことがある人はいますか？」と聞いてみます。ぱらぱらと手が挙がるのを確認してから、「以前来たときにどんな作品があったのか覚えていますか？ 今回はそのときと違う作品が展示されていると思いますか」と話をつなげます。新収蔵作品の前ですの、もちろんはじめて見る作品となります。

当館の所蔵作品展は、いつも同じ作品が並んでいるわけではなく、「特集」コーナーなどで展示替えを行っています。

今年度の所蔵作品展は三期に分けて開催しますが、そのなかで「特集」は六回、版画コーナーは十一回、さらに、ふだん特別展を開いている展示室で二回の「拡大展示」を行います。コレクションの紹介としては、かなり充実したラインナップではないかと考えています。そのような美術館の展示活動のことや収集活動について知っていたかどうかで、新収蔵作品の紹介展示はいい機会になるかもしれません。

お気に入りを探そう

今回の「美術をたのしむ、美術館をたのしむ」では、子どもたちを展覧会に案内するときのようすや新収蔵作品のいくつかをご紹介します。

案内のメニューは、学年や観覧時間など個々の条件によって異なりますが、この時期は何度か「お気に入り」を試みています。先日の小学校三年生の見学のときは、次のような流れでした。

まず展示室に入ったあたりで活動の仕方を説明します。そしてその部屋に飾ってある作品をゆっくり見てもらい、お気に入りの作品を心のなかで決めたら元の場所に戻ります。その後は、作品を一点ずつみ

んなで見ながら、気に入ったところよかったところを発表してもらいます。

とてもシンプルな活動なのですが、大事なのは、最初に話す「お気に入り」の意味についての説明です。人は、何かを気に入ったり好きになったりしますが、それは決して他の人に代わってもらったことのできない自分だけのものといえます。そのあたりのことをうまく伝えられるかどうか、この活動の成否に関わってきます。

例を挙げた話もします。子どもたちに好きな果物をたずねると、イチゴ、リンゴ、みかんなどと答えてくれますが、なかには「バナナは好きでない」という意見が出てきます。そのようなとき、「他の人が好きであっても、自分が好きでなければお気に入りにはなりませんね。絵を見るとときも同じです。自分の感じ方を大切にしてください」というと、みんななどことなく納得したような表情になります。要は、お気に入りへの作品、何か気に入ったところがある作品を、自信をもって選べるようにしたいのです。

果物の例は身近なので、保育所の子どもたちが鑑賞するときに話をするのですが、小

学校三年生になったばかりの子どもにも通じるのだと思いました。

この活動でもう一つ大事なものは、お気に入りとなった理由を聞くとき、いい意見だと思ふ気持ちを素直に伝えることです。あまり感心しないのに無理矢理「よかったです」というと、いくら取り繕ってもその気持ちは子どもに伝わってしまいます。ですが、心からいい意見だと感じているのなら、そのような心配もありません。

確かに言葉の少ない子は、「鳥の色」とほつりというだけの場合があります。しかし、「どの鳥？」などと質問をしていくと、具体的にその子が何に注目したのかがだんだんと分かってきます。そのようにして、どの子も自分のお気に入りについて教えてくれるのです。

案内する人は、詩や文章の行間を読むように、子どもの気持を推し量っていく必要があるのかもしれませんが、しかし、子どもの話を聞きながら作品を見ていると、子どもの気持ちと作品がどのように結びついていたのか想像できるようになってきました。声の調子や表情の一つ一つから、子どもの個性や気持が感じられますので、案内する側として楽しくない

わけはありません。

たとえば、広島晃甫の日本画を見て、「葉っぱの黄緑色がきれいだった」「花のピンクが外に向かって濃くなっているのがきれい」「鳥が歩いているところの緑が水のように」などの意見が出てきます。質問しながらお気に入りとなった理由を教えてください。お気に入りもなかで、それを聞く他の子も、発表した子が作品のどの部分ができます。いろいろな意見が出てきますので、「同じです」と意見をそろえる気遣いも必要なくなっています。

もちろん最初に発表する子は勇気がいるのでしようが、お気に入りとなった理由をみんなに知ってもらおう楽しさが共有されていくと、だんだんと発表の緊張感がなくなり、「私も発表してみよう」という場の空気もできてくるようです。

それぞれがナンバーワン



大西伸明 cabbage/dots 2012年



広島晃甫 若葦(部分) 大正期

このあたりで、「新収蔵作品を中心に」のコーナーにどのような作品があるのかご紹介しましょう。まず、澤田知子(「TIARA」(二〇〇八年)。白いドレスを着た女性たちが、赤いひな壇の上にずらりと並んでいます。彼女はミスコンテストの出場者のようで、数えてみると十五人います。しかし子どもたちも直ぐ気づくのですが、これは、一人の女性が髪型や表情を変えて写した写真を組み合わせ、集合写真のように構成したものです。コンテストの出演者に扮しているのは作者の澤田さん本人。かわいい雰囲気の人あごをあげ表情の硬い人、まじめそうな人、さまざまです。澤田さんは次のように述べています。

私は世界中の全ての人はそれぞれがそれぞれにナンバーワンだと思っています。美しいということは人の心を幸せにすることもあるし時には感動をも生みます。でもそれはきつと比較できない美しさ、そのものが、その人が、もともと持っている美しさが表現された時に本当の美しさ、感動を生むような美しさが現れてくるのだと思います。

「その人が、もともと持っている美しさ」が表れた時、本当の美しさが現れる。そのような考え方からすると、コンテストで一番を決めるのには批判的なのでしょう。優勝者が頭にのせるティアラは、作品名にありながら誰もつけていないところにも、「全ての人はそれぞれがそれぞれにナンバーワン」だという作者の考え方が表れています。

ミスコンテストのように、誰が優れているかを決めるためには、何らかの基準を設けなければなりません。ですがそのような基準は、ミスコンテストだけでなく、いたるところに人の世の生きづらさがあります。一人一人を尊重するには、一つの価値観や自身を信じる考え方を押しつけず、多

様性を認めることが大切です。澤田さんの作品は、そのような価値観の多様性を示すことができるアートのはたらしを伝えているように思えます。

そう考えていくと、「TIARA」の意味と、「お気に入りを探そう」の活動で、子ども一人一人のお気に入りや感想を大切にすることは繋がっているように感じられます。

*澤田知子(「TIARA」)について、「徳島県立近代美術館ニュース」九十七号(二〇一六年四月)に吉川神津夫上席学芸員の解説があります。澤田さんの言葉も同書から。

大西伸明さんの作品など

「新収蔵作品を中心に」のコーナーでは、大西伸明さんの「cabbage/dots」(二〇一二年)も子どもたちに注目されました。キャベツを切った断面や背景にある点の連なりが、鮮明に写ったところとぼんやりしたところが混じり合う、不思議な印象を与える作品です。お気に入りとして選んだ小学校五年生の女の子は、「キャベツの芯がトンネルに入って進んでいる」などと想像を交えた感想を元気に語ってくれました。イメージを膨らませよう励ますと、気持ち解放され自由な感想が出てきます。

徳島県出身の日本画家、広島晃甫の作品もこのコーナーにあります。展示作品のうち四点は、広島支援者の子孫にあたる方から当館に寄贈されました。(「若葦」は、にじみの表現が特徴的な大正期の作。画家の没後刊行された画集にも収録された佳作です。春と秋の花鳥を対となるようにして描いた「春秋花鳥」(二曲一双屏風)には、昭和初期の装飾的感覚が表れています。

6月の催し

■所蔵作品展 2016年度 第1期「特集 新収蔵作品を中心に」
7月3日「日」まで

■拡大展示「巨匠たちの版画」
シャガール、マティス、ピカソ、ルオー
6月5日「日」まで

・テーマで知る名品「彫刻の素材と表現」6月5日「日」14時～14時45分、講師 安達一樹(当館)

7月の予定

■特別展「暮らしの感覚ーアートと人とデザインが交流する空間」
7月16日「土」から

■所蔵作品展 2016年度 第2期「特集 立つこと、座すこと、歩むこと」
7月9日「土」から